



Book Review 地域を越えて広がる「もう一つの資本主義経済」 [「その日暮らし」の人類学 : もう一つの資本主義経済 小川さやか・著, 中国経済学入門 : 「曖昧な制度」はいかに機能しているか 加藤弘之・

梶谷, 懐

(Citation)

外交, 41:140-143

(Issue Date)

2017-01

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003915>



【選評】

神戸大学大学院教授

梶谷 懐



「もう一つの資本主義経済」 地域を超えて広がる

中国経済がそのプレゼンスを世界中で拡大するにつれ、必ずしも中国研究を専門としない論者がその実態について論じることも多くなってきた。それらには偏見に満ちたお粗末な「分

析」も多いが、中には専門家が気付かなかつたような斬新な視点で中国の現実を切り取り、読んで目からウロコが落ちるような卓見に出会えることもある。人類学者としてタンザニアの都市

「その日暮らし」の人類学

もう一つの資本主義経済

小川さやか・著

光文社新書 / 2016年 / 799円+税

に住む零細商人の行動をフィールドワークしてきた、小川さやかによる『その日暮らし』の人類学』もそんな本の一つである。

この本のユニークなところは、いわゆる近代的な資本主義社会を支える理念系としての「目的合理的な経済人」でも、近代化に取り残された農村などに生きる「伝統・慣習に縛られた前近代的な人々」でもない第三の類型として、近代化された都市で「その日その日を暮らす人々」に注目し、彼（女）らが織りなす「もう一つの資本主義経済」の姿を描き出したところにある。もう一つ注目したいのは、この本の中で彼女がフィールドとするアフリカの零細商人だけではなく、香港、および深圳、広州といった中国南部の都市の状況が頻繁に登場し、そのような「もう一つの資本主義」において中国（人）がはたしている重要な役割を浮き彫り

にしている点である。

「その日暮らし」の経済活動

この本のキーワードになっている「その日暮らし (Living for Today)」とは、著者がアフリカの都市をフィールドワークし、現地の人々と交流する中で抽出された概念である。それは、不確実な収入を前提としながら、「何らかの共同体的な関係を前提としてどれくらい生産するかをあらかじめ計画しない (四九頁)」あるいは「ある仕事のプロになるのではなく、なんでもある程度こなせるジェネラリストとなる生き方 (六〇頁)」として、「不均質な時の流れにおいて、機が熟するのを辛抱強く待ち、熟した好機を的確に捉える (六四頁)」ような生き方である、と説明される。

このような「その日その日を暮らす人々」は、特に主流派経済学の文脈で

は、目的合理的・計画的な選択に基づいた近代資本主義とは相いれず、「低成長・低開発」をもたらす「遅れた」存在として、彼(女)らが生きる都市インフォーマル部門と共に、概して低い評価を受けてきた。しかし、本書を含め近年の研究では、むしろこういった「その日その日を暮らす人々」が都市にもたらすダイナミズムは、グローバル資本主義の進展と不可分であり、むしろそれを積極的に支える存在である、といった評価がなされるようになっていく。

中国の商習慣が世界標準に

そこで重要な意味を持つのが、グローバル化の中の中国経済のプレゼンスの増大、およびその「殺到する経済」とも形容される独特のダイナミズムである。ここでいう「殺到する経済」とは、「儲かる」と思われる業種にどっ

と大勢の人びと、会社が押し寄せて、すぐにその商品が生産過剰に陥り、価格が暴落して、参入した企業が共倒れになる経済 (八一頁)」のことを指す。こういった、不確実で「一見」アナーキーな状態が再生産されつつ存続するという中国経済の実態は、中華人民共和国が成立する以前よりしばしば「安定なき停滞」と表現されてきた。現代に生きるアフリカ人商人にとっても、中国人とのビジネスは儲かる代わりに不確実性も大きいという。コピー商品や粗悪品も多い上に、取引の合意は正式な契約書の形で行われなため、発送・品質の面でトラブルが生じてても公法的手段に訴えるのが難しい、などのリスクが付きまとうからだ。

「その日暮らし」の経済行動は、こういった「殺到する経済」における不確実な状況が、いわばもう一つのグローバルスタンダードとして中国を中心と

して世界に広がる中で、それに適合的な行動様式として様々な地域で広がりがつあるのかもしれない。

実際に、確定した利益が得られない状況の下で、できるだけリスク分散的に多様な商品を扱うこと、零細業者同士の分業・協力のネットワークによりリスクをヘッジすること、「生きていくために十分な利益さえ手に出来ればよい」という楽観的なメンタリティを持つこと、など、中国における「山寨（ダリラ）携帯」の生産を行う零細業者と、本書が描き出す「その日暮らし」のアフリカ人商人の行動には相通じるところが多い。

曖昧さから紡ぎ出す資本主義経済

昨年夏に惜しくも急逝した中国経済研究者、加藤弘之の遺著となった『中国経済学入門』（名古屋大学出版会、二〇一六年）は、このような不確実性

に満ちた中国における資本主義のダイナミズムの源泉を、市場経済取引を支える「制度の曖昧さ」にあるととらえている。

特に同書で注目されているのが、戦中期から戦後にかけて活躍した社会学者、柏祐賢^{かしわすけかた}によって唱えられた「包」



中国経済学入門

「曖昧な制度」はいかに機能しているか

加藤弘之・著

名古屋大学出版会 / 2016年 / 4500円+税

の倫理規律である。「包」とは請負の総称で、「指定した内容の完成を担保するなら、あとはあなたの自由にしてよい」ことを意味する。例えば、農家と村の間の、あるいは上級政府と下級政府の間の請負は、文革後の中国経済の活性化に大きく貢献した。また、「山

「寒帯」の生産にみられる零細業者同士の分業・協力のネットワークは、「包的な関係の連鎖として捉えることができよう。加藤は、このように「包」に代表される「曖昧な制度」が、グローバル経済の変動がもたらすリスクに対してある種の柔軟性と意外な強韌さを持っていることを積極的に評価している。

アフリカをフィールドとする小川の『その日暮らし』の人類学と、中国をフィールドとする加藤の『中国経済学入門』は、地域とディシプリンの違いを超えて響き合う点を多く持っている。その共通点の一つが、経済のインフォーマル性への注目である。両者は内部に分業体制をもつ近代的な企業へと発展せず、個人操業形態のままどどまるアフリカや中国の零細企業に注目し、その「合理性」を解き明かそうとしている。また、もう一つの共通点

としてその「類型論への志向」、すなわちアフリカや中国の経済において観測されるインフォーマル性を「市場の未発達な段階における過渡的な現象」と解釈するのではなく、「もう一つの資本主義経済」を形作るものとして類型的に捉える姿勢が挙げられるだろう。

ただ、両者の視点には大きな違いもある。自らが商人としてアフリカ人商人と深い関わりを持ってきた小川にとって、国家などの公権力は、あくまでも「フォーマル性」を押し付けようとする存在である。それに対し、加藤には中国の国有企業や地方政府など、公権力に近いアクターも、むしろ「曖昧な制度」すなわちインフォーマル性の積極的な担い手として評価する姿勢が顕著である。

この両者の視点の違いは、「その日暮らしを暮らす人々」と公権力との関

係をどう考えればよいのか、というもう一つの「問い」を読む者に対して投げかけよう。国家や政府が押し付けようとするフォーマルな制度・ルールに対して、零細な業者たちがその「裏をかき」ようにして自生的なルールを形成することによって形作られる「もう一つの資本主義経済」は、そもそも融通のきかない、権威主義的な国家や政府の存在と相互補完的な関係にあるようにも思えるからだ。

いずれにせよ、このような中国を中心に広がりつつある「もう一つの資本主義」をどのようにとらえるのか。また日本に暮らす私たちはそれとどのように向き合っていけばよいのか。それらは、単なる日中間の経済関係にとどまらない、グローバル経済の中でどう生きるか、ということに関わる大きな課題となっていくのではないだろうか。●